カロッサおよびドイツ、オーストリア地方を巡る文学芸術の旅

一般科目（数学）　梶川　雄二

パッサウ市の風景

高名な作家ハンスカロッサは現在のドイツのパッサウ市付近で生を受けました。彼の小説「ドクトルビュルゲルの運命」に出てくるグレンツブルグ（国境の町の意味）とはここパッサウの事であろうと推測されます。そして文化的にもドイツとオーストリアの中間のような存在であります。

私は学生時代に2度パッサウを訪れたことがあります。1回目はフランクフルトに連泊し、寝台急行に乗って朝早くパッサウを訪れ、そこで観光タクシーを雇ってパッサウの市内と3つの川の合流地点（イン川、ドナウ川、マイン川）を見て回りました。カロッサの生家はパッサウ市の郊外であったらしく残念ながら訪ねる事はできませんでした。

２回目はもっと大規模な旅です。パッサウでのホテルの予約をしていなかったので、ふと入ったドイツ版ケンタッキーフライドチキンの店をチェーン店で持つウィンナーワルト（ウィーンの森の意味）で昼食をとっているときに、上の階が簡単なホテル業も受けていることに気づきました。早速店長と相談し、泊めてもらうことができました。

バックパッカーの学生さんたちも多く宿泊しており、「ここパッサウからオーストリアのリンツまで船が出てるよ、すばらしかった。ライン川よりずっといい」という有力な情報を得ました。予約が必要だったので（仮にも国境を超えるわけなので）早速船のオフィスに行って翌日の便を予約しました。またまた有力な情報で、オーストリア各地にウィンナーワルトがあり、簡単なホテルも営業しているとのことです。私は初めて訪れるオーストリアの事を夢に見ながら眠りにつきました。

ドナウ川は各地で水面の高さが違っていて、船は何回か運河のような流水を調節するところで止まりました。水面の高さに合わせるためです。日本ではそういう所はないと思います。両岸にはライン川のように城が立ち並び美しい風景でした。ライン川下り、ライン川下り、と日本では騒ぎますが、こちらのドナウ川下りもなかなかすばらしいものです。日本人は私だけでした。

船はゆったりと進み、昼過ぎにリンツに着きました。モーツァルトの交響曲第36番「リンツ」に出てくるリンツです。学生で急ぎの旅でなかったのでゆったりその日はリンツのウィンナーワルトに泊まりました。リンツ郊外の山々の美しい所へもバスで行ってきました。

リンツ市の風景

翌日はザルツブルグの中心街にウィンナーワルトはありましたが、電車の音がうるさくてよく眠れませんでした。また、ザルツブルグの駅から乗ったタクシーの運転手がひどい人で遠回りをし、チップを500円も要求されました。学生で身なりも貧相だったので被害は最小限ですんだようです。個人的にヨーロッパへ行こうという人はこういう悪徳タクシーに要注意。

せっかくなのでサウンドオブミュージックに出てくるマリアさんの修道院に行き、その後ザンクトウォルフガング発のSLに乗りにポストバス（郵便局が経営している）を利用しました。日本人は私の他に2人だけ。皆ユーレイルパスが使えない路線なので文句を言っていました。

着いて一番で登山SLの窓口で切符を買い求めました。日帰りだったので帰りの切符がとれるかどうか心配でしたが、無事にとれました。一緒に行った日本人たちは英語はできるけどドイツ語ができないので大分苦戦していたようです。教訓、3つぐらいは外国語できるようにしましょう。

展望台でブラジルでドイツ語の教師をしている女性と知り合いました。お里帰りだそうです。この日はすばらしく快晴の日で、遠くの山がよく見渡せました。

この後クーフシュタインという小さな村で（もちろんウィンナーワルトに）宿泊し、教会の大きなオルガンの音を聴きました。寝台特急でコペンハーゲンへ移動し、アエロフロート（ロシアのフライト）で帰国しました。

この冊子は再生紙を使用しています

としょぶらり
米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344－5634
第 94 号
平成２５年２月１５日　発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター

11/2～3文化祭の古本市の様子　〈図書館ロビーにて〉

学生図書委員会の総意で、古本市の収益金９、７２３円は東日本大震災義援金として寄付しました。古本市にご協力頂いた方々には紙面を借りてお礼申し上げます。

目　次

平成 24 年（第 39 回）校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

〈エッセイの部〉

佳　作　機械工学科　2年　権藤　正也　「生きる」って何だろう ……2

〈寄　稿〉

電子制御工学科　2年　別所　希輝　科学者として、息子としての絆

機械工学科　4年　切明　弘大　『星の王子様』を読んで ……3

一 般 科 目　梶川　雄二　ドイツオーストリア紀行文 ……4

平成24年度（第39回）

校内読書・エッセイコンクール優秀作品

エッセイの部

佳　作

「生きる」って何だろう

機械工学科2年　**権藤　正也**

僕はよく、
「自分が何人もいればなあ」
と思うことがある。一人でいることが少ない人達にとってはそうでもないかも知れないが、こと自分自身ほど都合の良い存在はいない。自分自身だから自分のことは全て知り尽くしているし、何しろ誰よりも身近だからだ。しかしそれは結局、ある時は
「何をやっているんだ、行くぞ」
と自分を引っ張ってくれ、またある時は
「ここは自分に任せておけ」
と自分を手伝ってくれる、そんな自分だけに都合の良い存在が欲しいと言っているだけだ。

僕はとにかく「勝ち」と「カッコよさ」にこだわる。綺麗に終われないと「カッコよくない」と思ってしまうのだ。そしてここでもやっぱり、自分にとって都合の良い結果がそこに至るまでの過程や方法を無視してポンと出てきてくれればそれに越したことはないという姿勢でいるので、最後の最後で、泥臭い「カッコ悪いこと」をする羽目になるのだ。

僕はつまり、人生の「攻略本」とでも呼ぶべき本の、最初から終わりまで事細かに書いてあって、それさえ頭に入っていればもう何も恐くないというような道標が欲しいのだと思う。外出する時に忘れ物が無いか心配するのは、そもそも根底に自分が用意したものに見落としが無いか、本当に必要だったものが外出先で浮上するのではないかという不安があるからだ。要するに転ばぬ先の杖が無いまま暗闇をさ迷っているようなもので、これは非常に胃と心臓に悪い。

僕はふと、考える。何故そんな取り越し苦労をしているのだろうかと。そんなことを思うぐらいなら、あの日あの時にやっておけば良かったのではないか、と。いやいや、と俺は考えなおす。そもそもこの不確定要素だらけの現実が悪いのだ。テレビは夜中にばっかり面白い番組を流すし、ネットの海は広大すぎて泳ぎ疲れる暇も無い。第一この現実こそが俺の努力の芽を摘んでいくのだよ、と。キミの為だと僕が言い、コレも己の為だと僕が言い。結局、意志の弱い「己」は、長年の悪友たる「悪魔」の方へと引っ張られていく。当然この不毛な議論に第三者はおらず、いたとしても悪魔は虎視眈々と己を引きずり込む機会を狙っている。こうして僕の中の地球はいつも通りに回っているつもりなので、周りの惑星の自転と合わせると自分の方が異常に遅いという事実に困惑するのだ。ならいつもより多めに回せばいいではないかと言うことだが、その話の答えが先の例えなので仕様が無い。

早い話が、現実逃避したくなるほど現実世界に興味を失ってしまったのである。テレビのニュース番組に殺人事件の四文字を見ない日などほとんど無いし、人類滅亡の年と派手に騒がれた2012年も上半期が過ぎた。人対人の決着の無い論争なんて聞き飽きたし、今よりもっと酷いかそれほどではないけど今よりほんの少し悪化している未来の二択しか無いような状況で頑張れ頑張れとはやし立ててもそれは空元気を強要しているだけだろうと思ってしまうのだ。大衆社会の形成の為にと突き出た杭を叩き壊してこれが正義だと言わんばかりの世の中に自分はとっとと見切りを付けたいのである。

しかし、と僕は考える。これだけ好き放題言っておいてやっていることが成すべき課題の放棄と好きな物の前に常駐していることか、と。自分に世界を変えるなんて無理だと諦めることこそ出る杭を打ち自分の首を真綿で締めることではないか、と。そう、自分は自ら衰退することを望み、何も行動を選択せず無気力に日々を過ごし、そして滅びの時を迎えようというのだ。指示待ちの人間ここに極まれりである。

そんな自分対自分の押し問答を繰り返すうちに、一つの呟きのような言葉が漏れた。
「生きるって何だろう。」

それはとてもありふれていて、しかし誰もが心の内に抱えている、所詮は答えの無い問いだ。けれどもそれは、今の自分を考える上でとても重要な問いだった。

僕は今までずっと、生きるとはこの世にその証を残すことだ、と考えてきた。しかし、何も残せずに消えて行った命、あるいは産まれずに消えた命。「命」となると、その大きさはもう人間のスケールでは測れないだろう。僕は今年の大河ドラマをあまり見なかったけれど、諸行無常、盛者必衰ということは否応無しにこの17年間、感じてきたことだった。

「生きる」って何だ。「いのち」って何だ。それは余りにも途方の無い、答えの無い問いだけど、それを知る為に生きてみたいと思う。上空から地上を見ているだけじゃ、小さな花さえ見つけられない。それならせめて地面を這ってでも、それを見つけたい。今更でもそれが僕の生きる理由だということが解かった。

学生図書委員　寄稿

科学者として、息子としての絆

電子制御工学科2年　**別所　希輝**

「ジェノサイド」という小説は、バグダッドで任務を終えた傭兵、日本の大学院で薬理学の研究をしている学生、ホワイトハウスの大統領をはじめとする官僚、この三つの視点から語られる。最初は全く繋がりの無いように思われた人物達が、「進化した人類」という存在によって繋がっていく。東京・コンゴ・アメリカと、遠く離れた舞台で、それぞれの戦いが始まるのだ。

私が注目したいのは、主人公の一人である古賀研人だ。彼は、大学院で新薬の研究を進めている最中に同じ研究者であった父・誠治を亡くす。生前の父親を快く思ってなかった研人であったが、誠治が残したメッセージに導かれ、治療が出来ないとされていた難病の特効薬の開発にとりかかる。最初は戸惑い、命の危険にさらされ、「無理だ」と諦めていた研人だったが、友人や助けを求める人たちの姿に励まされ、見事特効薬の開発に成功する。新薬を届けようと急ぐ研人のもとに警察がやってきた時の研人の心情に、こうある。

「しかし研人は、もう怯えたりはしなかった。新薬開発をふいにされてたまるかという思いが、強い怒りに変わっていた」

最初は父親を嫌い、疑っていた研人だったが、最後には科学者として、また亡き誠治の息子として、立派にその役目を果たし、難病に苦しむ子供たちを助けた。

この小説は、研人と誠治をはじめとする遠く離れた人たちとの絆（登場人物の言葉を引用すると“情”）を描く作品でもある。進化した人類という存在によって結び付けられた人達の不思議な繋がりを、作者は文章中に表現している。

私は、研人のように、決意を持って行動できる人間になりたいと思う。誰かのために自分の信念を貫くこの人物は、私がこの小説の中で最も尊敬する人物だからだ。

『星の王子様』を読んで

機械工学科4年　**切明　弘大**

このお話を読んで、私は子どものころに戻ったような気持ちになったり、あったかくって軟らかい気持ちがしたり、子どものころには分からなかったような切ない気持ちになったりしました。

飛行機のトラブルで砂漠に不時着した飛行士は、可愛らしくてあどけない、でもかなり不思議な少年に出会います。その少年は飛行士に羊がほしいとお願いするのですが、その羊はなんと絵で描いたものでかまわないと言います。そしてその羊を自分の星においてバオバブの芽をたべさせるのだと言います。そのような会話をして飛行士はこの少年は小さな星に一人で暮らしていた王子様だと気が付きました。

王子様は自分の星でバラの花との恋がうまくいかず、自分の星にバラを残して様々な星に傷心旅行をしていたところ、飛行士に出会ったのだと言います。

王子様は旅先で出会ったキツネや、星に残したバラとは違う沢山のバラたちと出会い、残してきたものの大切さや、広い世界のなかの自分を客観視したりして多くの価値に気が付いていくお話です。

このお話は童話なのですが、大人になってからでも是非読んでみてほしい本です。